



ホスピスだより

2017

〒470-0111 愛知県日進市米野木町南山 987-31
電話 代 表 (0561)73-7721
ホスピス (0561)73-3191



題 字

川原啓美

日野原重明先生を偲んで

愛知国際病院 院長 太田 信吉

105歳、現役医師を全うされ、去る7月18日、日野原重明先生が自宅で静かに天に召されました。連絡をいただいた時、来るべきものが来たかという思いと、これまで医師として人のために尽くしてこられた先生の歩みの豊かさに思いを巡らせました。

日野原先生は、川原啓美先生が愛知国際病院をつくられた時から理事としてお働きくださいました。看護師が看護帽を被らなかったり、病棟で薬剤師が勤務したり、検査技師が採血を行うなど、アメリカ式システムを持った病院をつくることを応援して下さったと聞いています。そして愛知国際病院にホスピスをつくる時に力を尽くしてくださいました。ホスピスをつくるのに金銭的に援助をいただける可能性が高く、日野原先生の推薦があれば間違いないのではと思って動きましたが、結果は公的病院ではないとのことでいただけませんでした。それでもホスピスをつくることは諦めずあいちホスピス研究会や名古屋YWCA、豊田ボランティア協会の協力を得て、市民の方から1億を超えるご寄付をいただいて愛知国際病院のホスピスは完成しました。ですから、日野原先生のお働きがあったからこそ、ホスピス実現への想いが継続し、地域と市民の皆様を支えられて、ホスピスケアが始められたのだと感謝しています。

日野原先生は多くの言葉を語って来られました。CureからCareへ（病気を治すことが難しくなっても、生きていくことをお世話することはできるし、生活の質を高めることが大切である）、医学とはサイエンスの上に成り立っているアートである（医学はサイエンスであり、サイエンスで助からない病気も多く存在する。でも医学がアートだとしたら、患者のことを心から思い、秘められた優しさ、笑顔、話を聴いてあげられること、そのことには限界はない）など、ホスピスにとって大切な言葉を思い出します。

川原先生、日野原先生は、人にとって本当に大切なことを私たちに教えてくださいました。きっと今は天国で、いっぱい語り合いながら、私たちの働きを見守ってくださっていると思っています。



ホスピスに来てからの私の暮らしと日々思うこと

安井 誠子さん

私は、このホスピスに引っ越してきました安井誠子と申します。末期の虫垂がんの腹膜転移で要介護5のからだです。けれど、このホスピスに入って、今は毎日とても楽しくて幸せな日々をおくっています。

入院したばかりの頃の私は、心にバリアを張って、親切な看護師さんたちに対してとても失礼な対応をしたり、（ドアストッパーの）かわいいニワトリちゃんを無視して戸を閉め切って、自分の世界だけに閉じこもり今から思えば、なぜあのような態度しか取れなかったのだろうと思い、失礼なことをしたと心からお詫びしたい気持ちでいっぱいです。その頃の私は、家族と離れなければならなかったストレスなどから気持ちがすさみきっていたのでしょう。けれど、ホスピスで暮らしていくうちに心の氷も解け、気持ちもだんだん明るくなり周りの人たちにも心を開いていきました。

ここは、風景の美しい自然たっぷりの環境にあり、院内にも自然があふれ、美しい花々に感動し、今は車いすの私も入院したばかりの時は裏庭をよく散歩しました。梅、桜、かりん、木蓮、柚子など季節ごとに美しい花を咲かせます。皇帝ダリアはここで初めて知った花です。珍しい鳥との出会いもありました。

月曜日の絵手紙、火曜日の押し花で作ったコースター作り、水曜日の音楽療法は私にとってとても楽しい時間です。体はしんどいので、長い時間は参加できませんが気持ちはとても元気になります。絵手紙や押し花は、知らなかった世界でホスピスに来て初めて経験したものでした。1階のロビーにおいてあるピアノを弾かせてもらうことも大きな喜びです。車いすでの送り迎えに看護師、ボランティアさんの手を借り、感謝の気持ちでいっぱいです。3時のティータイム、部屋に飾ってくださるかわいいお花、ボランティアさんの温か

さに感動します。季節の行事もとても楽しくて、いい思い出になっています。私はホスピスに引っ越してきてから身体的には病気が少しずつ進行しているとはいえ、気分的にはどんどん元気になり、ずっと忘れていたしゃべること、笑うこと、歌うことを取り戻しました。

不注意な私は、よく転倒し、皮膚が弱っていることもあってあちこち傷を作ります。先生や看護師の手厚い治療によって順調に治ります。そしていつも安心な気持ちでいられます。ただ、いま辛いのは右足の神経痛です。これさえ治ればいいなあと思う毎日です。

私が、一番アピールしたいのは先生、看護師さん、ボランティアさんなどスタッフの方々の温かさ、優しさです。1日でも長く生きられるように私も気持ちをハイにしていろいろなことを楽しんで日々を過ごしています。私はもう実家に戻る気持ちではなく、ここが私の家だと思っています。そしてスタッフの方々と家族同様、私の家族と思っています。

今、私はとても幸せです。

2017年 春 安井誠子



お誕生日 ホスピススタッフと

安井さんは2017年初夏、眠るように旅立たれました。今回この手記を残していただいたこと、掲載を快諾していただいたご家族に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

ホスピス緩和ケア病棟認証制度について

ホスピス医師 大村 浩之

1990年に診療報酬として緩和ケア病棟入院料が新設されて今年で27年。6月現在、全国で386施設、7904床まで増えました。1999年に愛知県初のホスピス・緩和ケア病棟として当院ホスピスが開設されて今年で18年。現在、当院を含めて18施設、359床が愛知県下で稼働しています。

全国のホスピス・緩和ケア病棟を束ねる同業者組合として「特定非営利活動法人 日本ホスピス緩和ケア協会」という組織があり、ホスピス・緩和ケア病棟の約90%が正会員として加盟しています。この協会が、増加したホスピス・緩和ケア病棟すべてが質の高いケアを提供し社会から信頼されることをめざして、今年4月から認証制度をスタートさせました。初年度の今年、当院ホスピスを含めて162施設が認証されました。

認証の中身はどのようなものかという点、ミシュランに代表されるような「格付けランキング」ではありません。ケアの質そのものの優劣を評価するのではなく、質の向上をはかるための「取り組み」を評価したものです。具体的には、①ホスピス・緩和ケア病棟で実施している医療やケアの状況、運営の状況などを社会に公開する取り組み、②多職種スタッフによる話し合い（カンファレンス）を通じて自分たちが提供しているケアの質の向上をはかる自律の取り組み、③第三者や遺族の評価を受けて、その指摘を受け入れる謙虚な取り組み、この3つの取り組みを評価したものです。

当院ホスピスでは以前から取り組んでいた内容だったため、普段どおりの活動を認証していただいた印象ですが、認証されたことを喜んでいるわけではありません。質の向上に取り組んできた結果として質の高いケアを提供できる施設であることを患者さん、ご家族、周辺の医療機関から求められているからです。遺族評価では「とてもやさしくしていただいて、本人が満足していたのが何よりです。」とお褒めの言葉もいただきますが、「家族への配慮が今ひとつだった。」など厳しい意見もいただいています。

今回認証された質向上の取り組みを今後も真摯に継続し、その成果としてケアの質そのものを高めなければならないと強く感じます。私であれば、ホスピス医として苦痛緩和の知識、技術に精通して最善の緩和医療を提供できること。看護師であれば、やさしさを伝える技術を磨いて患者さん、ご家族の心と日常生活に寄り添うケアを提供できること。それぞれの職種が質の高いケアを実践できるよう、カンファレンスを重ねながらスタッフ一丸となって向上をめざしたいと思います。



死を生きる

～日野原先生、川原先生の言葉から考えたこと～

ホスピス師長 成田昌代

ホスピスを自宅に…、家のようにホスピスで生活していただけたらということをお願いしたいと思っています。しかし、家のように自分らしく生活すること、そのことがとても難しくわかりにくいものであるのだと感じています。なぜなら、ホスピスでの生活は、毎日が、今までにない新しい体験の中で生きていかななくてはならないから…なのかもしれません。時間の経ち方が違う、日々少しずつ弱っていく時間の中で、変化する自分を受け止め、自分と戦い、自分を乗り越えるプロセスがとても苦しく大変なことなのだと思うからです。あたりまえに動いていた足や手が動きにくくなることを自覚し、食事が自分で食べられなくなる、トイレに行けなくなる。口の渴きを感じても、目の前のお茶に手が届かない、飲み込みにくさや、自分の思っていることをうまく伝えられない、話しにくさを感じることも多くなるでしょう。そして、できないことを依頼することの難しさを感じているだろうと思っています。

その新たな体験とあたりまえを失っていく毎日の中で、新たな自分らしさを見出し、表現しながら大事な人たちと一緒に、支援を受けながらであるけれど、家のように過ごしてもらえることができたらと願うのです。死を生きる、すごい表現だと思いました。川原先生をこのホスピスでお見送りして2年が経ちました。そして、今年7月18日、日野原先生が口から食べられなくなったら点滴や胃ろうを

選択しないと決められた約4ヵ月後、105歳で旅立たれました。家族に感謝を伝え、死を生き切った人生と伝えられたとき、先生方の「死を生きる」、この意味を考えました。限られたいのちを川原先生はホスピスで、日野原先生は東京のご自宅で、死を迎えるその瞬間まで生き切り、そして死で終わるのではなく、亡くなった後も残された人の中に生き続けるいのちを残して旅立たれた、そのことなのかもしれないと思いました。

「月は必ずそこにあり、見えないときもあるけれど、雲間から一瞬覗くその時が美しく輝くんだ」と日野原先生が言われていました。人も同じで、自分が見えなくなってしまうことはあるけれど、必ずそこにいて一瞬見える輝きの時、この瞬間のいのちを大切にしたいと言われていると思います。そして、川原先生も著書の中で、ホスピスでの働きについて次のように書かれていました。「ホスピスで過ごす人のいのちの残照が最も美しく輝きながら消えていくのを静かに見守る働き」。その人がその人であるから大切であり、出会ったお一人おひとりが生き切ること、死を生きることができるようケアの在り方、環境をホスピスのチ

ームで考えていきたいと思っています。



スタッフによるオカリナ演奏



4月からホスピスに入職しました

武藤愛実：まだまだ経験不足ではありますが、頑張りますのでよろしくお願いします。

Mutou
Manami

後藤真由美：早く慣れようと現在検討中です。休日は着物に癒されています。これからも頑張りますので見守って下さい。

Gotou
Mayumi

高橋優里：自分が病気を患った時に経験したことを活かしつつ、先輩方の患者さん、ご家族との関わり方を通して成長していきたいと思っています。

Takahashi
Yuri

山口こずえ：社会人6年目、看護師としても6年目、おっちょこちょいで未熟者の私ですが、患者さんやご家族との関わりを通して日々成長していきたいよう頑張ります。

Yamaguchi
Kozue



Yanada Ai

築田藍：患者さんとそのご家族に「ホスピスに来てよかった」と思っただけのような看護を目指します。

Matsumura
Maako

松浦真愛子：4月からホスピス病棟に配属になり、5ヶ月が経ちました。慣れないことも多いですが、新たな気づきもあり、日々の業務に取り組んでいます。

Ozone Aya

小曾根綾：ホスピスはお部屋から色々な花がみれたり、ティータイムを楽しめたり穏やかで素敵な場所です。患者さんとともに日々楽しみを探しています。

笑顔で頑張ります。よろしくお願いします!!!



ホスピスでのひととき



ホスピス賛助会 報告と募集

収入	
寄付金	2,778,570
支出	
研究費	305,380
環境設備費（雑費より）	506,135
消耗品費	617,132
食材費	222,651
広告宣伝費（ホスピスだより）	126,640
建築費補填・運営費	1,000,632
支出合計	2,778,570

愛知国際病院ホスピスでは、賛助会員を募集しています。アメニティの充実（設備環境、造園、園芸）、ホスピスでの諸行事、ホスピス相談の充実、広報啓蒙活動、家族会の開催、ボランティア活動、教育活動等のために是非ご協力をお願いいたします。（ご入会頂いた方には、年4回発行の病院だより「みなみやま」と年1回の本誌をお送りいたします。）

入会方法 下記の口座に会費をお振り込みください。
郵便振替口座 00890-5-3757
口座名義 愛知国際病院ホスピス賛助会
1口1000円（おいくらでも結構ですが、できましたら5口以上でお願いいたします。）

明日葉の会へのおさそい



明日葉の会は、愛知国際病院ホスピスで大切な家族の看取りをした方々が集まり、思いを声に出し、分かち合う会です。「明日葉」という植物は、今日摘んだ芽が明日には伸びてくるというほどの生命力の強い植物で、それにあやかり会の名前としました。家族を看取られてから半年以上を過ぎた方を対象として、偶数日の第3土曜日午後2時から4時、病院の一室をお借りして例会を行っています。続けてこられる方も、しばらく間を空けてこられる方もおられます。ご都合のつく時にご自由にご参加ください。詳しくは、下記までお問い合わせください。

お問い合わせ先：愛知国際病院ホスピス
電話 (0561) 73-7721 (代)
(担当) 太田一道

